

第3章 キリストと共に生きて得る最初の実

あなたの魂の回復と育成

本章の題名からも分かるように、この章全体の内容は、イエス様と共に生きることの最初の実は、あなたの魂の回復と育成であることであると要約できます。そこで、一つお尋ねします。愛を経験したことも、見たこともない人が、人を愛することができるのでしょうか？簡単に答えますと、そのような人に、人を愛することはできないでしょう。また、自分の人生で喜びを経験したことのない人が、イエス様を知る喜びを、人に伝えることができるのでしょうか？安息もなく、イエス・キリストの力と共に生きたことのない人が、安息とイエス様の力を、人に教えることができるのでしょうか？どれも、答えは明らかでしょう。わたしたちにも同じことが言えます。自分自身の魂が回復され、いやされるまで、人に回復や、いやしを与えることはできません。ですからイエス・キリストの新しい信者は、何よりもまず、安息、保証、喜び、愛、自由、力、そして義の中で、自分自身の魂の回復を経験しなければならないのです。つまり、働けるようになる前に、よく休み、食べ、体力をつけ、健康に成長しなければならないのです。この世の赤子にと同じように、イエス・キリストにある赤子にも、要求されることなどはありません。ただあるのは、ゆったりとその幼児期を楽しみ、イエス・キリストの救いについてのよい教育を受け、健康に、強く、賢く育つことへの期待だけなのです。そのよう幼児期を過ごせば、よく準備され、これから一緒に歩もうする信者たちを、その言葉と行いの両面から導くことができるようになるでしょう。

だれもが主への実を結ばせることを望みます。しかし、種子から実が実るまでに、まず木やほかの植物に育たなければならないように、わたしたちも成長することなしには、実を実らせることはできないのです。種子が十分な太陽と水、そして大地からの栄養を必要とするように、わたしたち信者はもまた、救い主イエス・キリストからの太陽、水、そして栄養が必要なのです。イエス様は、「わたしのうちにとどまりなさい。わたしもあなた方のうちにとどまっている。枝がブドウの木のうちにとどまっていなければ、自分では実を生み出すことができないように、あなた方もわたしのうちにとどまっていなければ、実を生み出すことはできない。わたしはブドウの木であり、あなた方はその枝だ。わたしのうちにとどまり、わたしもそのうちにとどまる者は、たくさんの実を生み出す。あなた方は、わたしを離れては何もできないからだ」(ヨハネによる福音書第15章4節から5節)と言われました。わたしたちは、イエス様を通して生き、呼吸し、存在しています。わたしたちがわたしたちであるようにし、わたしたちの中に実がなるように働いてくださるのは、イエス様なのです。つまり、どれほどの誠実を尽くしていたとしても、実りは、わたしたちの努力や活動によるものではないのです。「ですがわたしは主のために働きたいのです」、そう思う人もいるでしょう。このような望みは、最初は当然で、立派なもののように見えます。しかし若い信者は、主に仕え、主のための働きをする前に、まず、主に聖なる務めを果たしていただくかねばならないのです(ヨハネによる福音書第13章4節から8節)。イエス様は、自分に「とどまる」ことによって実ると言われたことに注してください。わたしはこの「とどまる」と言う言葉が好きです。なぜなら、わたしたちは主イエスと共にとどまらねばならないことを意味しているからです。あちこち飛び回って主を喜ばせる方法を探すのではなく、主の御許(おもと)に休み、主に働いていただくのです。「あなた方は、わたしを離れては何もできないからだ」と言われました。主はわたしたちを通して働かれますが、わたしたちを通

して働かれる前に、わたしたちを回復なさる必要があるのです。第 1 章でも見てきたように、人が救い主イエスを信じる時、その人は事実、罪から解放され、完全な者とされました。その全生涯が、栄光に満ちた状態から、良きものからの栄光の状態へと移り変わるものとなります。この良ききものとは、その人自身の魂の回復から始まるのです。このようにして、枝であるわたしたちは、イエスの善を分かち、わたしたちが主と共にとどまるとき、善から善に変わっていくのです。別の言い方をしますと、わたしたちは主の善を分かち、主の姿に変わったのです。主は善です。ですからわたしたちも善なのです(ヨハネの第一の手紙第 4 章 17 節)。そして、イエス様が生きられるように、わたしたちも生きるのです。もう一度言いますが、わたしたちは、主の似姿に変えられたのです。

もし、上記のことに疑いをもたれる方がいれば、次のことを考えてみてください。世界の救い主への召命を受ける前、イエス様はどのように生きていたでしょうか？イエス様はその生涯の最初の 30 年を、普通の仕事をする、普通の人間として過ごされました。その事実注目していただきたいのです。イエス様は、3 年半の福音伝道に入り、病める者をいやし、世界を罪の中に死ぬことから救う前に、30 年を神の善を学ぶことに費やしました。つまり、イエス様は神の子として、神聖で完全な者として生まれたにもかかわらず、30 年を父なる神の恩寵、知恵そして強さを育てることに費やされたのです。わたしたちも同じです。イエス様のために働きをもつ前に、主から学び、そして主の安息を受けなければならないのです。「わたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。わたしは柔和で心のへりくだった者だからだ。そうすれば、あなた方は自分の魂に安らぎを見いだすだろう。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからだ。」(マタイによる福音書第 11 章 28 節から 30 節)わたしの好きな、テモテへの第二の手紙第 2 章 6 節でパウロが語った言葉は、次の通りです。「労苦をする農夫が、だれよりも先に、生産物の分配にあずかるべきである。」つまり、実させたその実からもたらさせる善を最初に受けるのは、そのために働いた人であり、そのあと、ほかの人へも分け与えるべきなのです。パウロはガラテヤ人への手紙第 5 章 22 節から 23 節のなかで、御霊の実は、愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制であると言っています。自分の命の中に、まずこの実を経験することによって、わたしたちはそれをほかに及ぼすことができるのです。

ここから本章では、イエス・キリストへの信仰によって得られる初穂、最初の実に重点を置きたいと思います。イエス様を信じることによって得られる実のすべては、イエス・キリストと福音という、すべて一つの源からもたらされるものと関連し、つながり合っています。ですから、繰り返しのご説明ばかりになっても、問題はなく、むしろその必要性があると思っています。これからわたしがお話する最初の実とは、つまり、安息と学びの実であり、また福音の中に定まり、イエス様の愛、善、喜びを自分で経験する実です。それに加え、クリスチャンとして生きることを悟るといっても、お話したいと思います。

その話へ移る前に、一点、とても大切なことを明確にさせてください。この点をはっきりとさせるには、最大の注意と、完全な理解が必要となります。それは、すでに述べたように、すべての実はイエスとその福音という、ただ一つの源からもたらされているという真実です。この真実を実感することによって、わたしたちの目は開かれ、何と、この実自体に重点を置くはないことが見えてくるのです。わたしたちはむしろ、その実がどこから生まれたのかに注意を向けるべきなのです。わたしたちの目がイエス様の上に

注がれるとき、イエス様の善と、その救いの実は、わたしの心から自然と自由に流れ出すのです。イエス・キリストへの信仰のほかに、何もいらぬのです。「本当にはっきりとあなた方に告げる。わたしを信じる者は永遠の命を持っている。」イエス様への信仰は非常に実用的なものです。そうです、信心とは人生においてとても実用的なものなのです！ですから、わたしたちにはほかに必要なものなどありません。この実とは、信仰の結果によってのみ生まれるものなのです。ですから、この実自体についての説明は、純粋に学術的な討論にすぎないのです。つまり、実とは、救い主への信仰からくる、自然の結果となります。決して、自らの実を实らせようと試みるべきではありません。イエス様はこう言われました。「わたしなしでは、あなたはなにごともしえない」と。ですから、「イエス様を信じる」ことが豊かな実であると、いつも心に刻んでおいてください。イエス様はわたしたちのたちの中で、イエス様の欲する実を实らせるように、働きかけてくださいます。イエス様は、ご自身の肉体への栄光の目的を達成させるという御心によって、わたしたちを作り変え、形作られるのです。このように、肉体が多く部位からなるように、わたしたちも多くの部位からなるのです。イエス様を信じる人々は、多種多様の姿、生活をしています。ですが、共通点が一つだけあります。それは、イエス様を信じ、イエス様ご自身とその肉体、つまり教会を愛しているという点です。要するに、わたしたちは全神経をイエス様へと集中させなければならないのです。この点を考慮しますと、信仰からの実について書くことが、だれかをつまづかせる原因となる危険性があることに気がつきます（わたしが案じているのは、イエス様から焦点をそらせ、信仰からの実へと向けられることなのです）。しかし、確固たる励まし、助言、一般的なクリスチャン生活はどのようなものであるのかという教えを、信者に伝えるために、イエス様の救いからの実について、詳細をご説明することは正しく、重要性があると思うのです。ですから、本書の残りを通し、キリストと共に生きるわたしたちの人生を、引き続き扱っていきたいと思います。

まず、安息について、少しお話したいと思います。安息とは、イエス様を信じる人に課せられた仕事、もしくは割り当てられた仕事の義務がないことを意味します。これは、もし指を動かしたくないと思えば、それさえもしなくていいという意味なのです。そしてまた、教会活動やプログラムなどにかかわらねばならない義務などないことも意味します。このような安息の特権により、信者には自分のしたいことができるという自由が与えられます。このイエス様における自分たちの権利を理解することは、疲れ、重荷を負った人々にとって大きな救いです。それはまた、靈魂のもっとも優れた贈り物、つまり愛への大きな勇気づけともなります。律法や義務のあるところには愛はありません。なぜなら、律法や義務のあるところには恐怖があるからです（ローマ人への手紙第4章15節およびヨハネの第一の手紙第4章18節）。

さて、このわたしがご説明してきた安息の概念について、感情を害する方がいらっしやることでしょう。その方々に対して、わたしの回答はとてもシンプルです。聖書がそう教えている、ただそれだけなのです。イエス様の信者たちは、仕事を与えられなくても救われます（ヨハネによる福音書第6章47節、ローマ人への手紙第3章28節、お第4章5節から6節）。これが神の恩寵なのです（ローマ人への手紙第4章4節）。お伝えしたいことを、より明確にするために指摘しておきたいのは、わたしたちにあるのは怠けの義務ではなく、安息への自由だということです。安息への自由とは、生涯何もせずに過ごすという意味ではありません。その逆に、イエス様を信じる人、主の安息に加わる人はすべて、父なる神のうえに豊かな実を实らせることとなります。信じる者から出る実とは、ごく自然と結ばれるものなのです。それはその

心の中の善意から実を結ぶものであり、鞭打たれるのではという恐れや、褒美を得たいという熱意から来るものではありません。

この魂の安息を体験することによって、わたしたちの体、心、そして精神がいやされるのです。さらに安息は、わたしたちに静けさを回復させ、なにごとにも心を煩わされることなく、救い主イエスに全神経を向ける機会を与えてくれます。たとえば、イエス様が教師だったとしたらどうでしょう。受け入れられること、またその御前に義とされることが、わたしたちの望みのすべてとなってしまう、その結果、わたしたちは主に敬愛の念を向けられなくなってしまうでしょう。なぜなら、受け入れられることや見返りを得るためだけに、主のために働くことになるからです。このような場合、わたしたちは安息できず、また主の無償の恩寵と愛を受けられなくなってしまうでしょう。しかし、わたしたちが、一寸の陰りもなく主を救い主として見るとき、無償の安息へと導かれるのです。そしてその無償の安息の中で、福音としてわたしたちの前に示された主の救いの、全きありさまを受け取り、経験しながら、恐れも邪魔されることもなく、崇拜と賞賛に身を献げるのです。

そういうわけで、次に、最初の実、学びとイエス・キリストの福音の学びと、そこに自分を定めることについて、移りたいと思います。福音を学び、そこに定まるとは、わたしたちが全生涯をかけて成長させていく点なのですが、同時に、福音について、一つの基本的な知識が必要になります。それがあればわたしたちは、「だまし惑わす策略により、人々の悪巧みによって起る様々な教の風に吹きまわされたり、もてあそばれたりすることがなく」なるのです（エペソ人への手紙第4章14節）。また福音を学び、そのなかに自分を定めることは、わたしたちにとって非常に望ましいことでもあります。なぜなら、福音は、わたしたちの救いへの知らせであり、その中で、豊かな継承物を見つけることになるからです。ヨハネによる福音書第6章47節で見たように、この救いとは、わたしたちが来世に楽しむものではありません。この世においても实际的、実用的に、そして楽しみに満ちたものなのです。ローマ人への手紙第1章16節のなかにも書かれているように「[キリストの福音]はすべて信じる者に、救を得させる神の力である」からなのです。こうしてイエス様の福音は、あなた自身とあなたのすべての敵の罪を解放してくれます。ですから、あなたはその生涯を通じて恐れることなく、聖と義の中に神に奉仕することができるのです（ルカによる福音書第1章74節から75節）。イエス様はわたしたちが命を、豊かに持つことができるように、わたしたちのもとにきてくださったのです（ヨハネによる福音書第10章10節）。福音を通してわたしたちに語りかけられる言葉を信じることによって、その主の豊かな命の力が見い出されます。したがって、イエス・キリストの福音を学び、そのなかに自分を定めることは、イエス様の信者にとって、最優先されなければならないことなのです。この点を、わたしは最初にお伝えしませんでした。それは、今、残念な傾向があるからです。つまり、キリストによって生まれた赤子が、その信仰を口に出した瞬間から、教会活動や儀式に追われるといった傾向です。まずは福音を学び、そのなかに定まらなければならないのです。しかし残念なことに、多くの場合、ほかのことをしたり学んだりするのに忙しくなり、時間がないのです。福音を学ぶ必要性や、そこにある恩恵にさえも気づくことができない人もいます。安息という実について先に触れたのは、このような理由からなのです。

第1章の後半で、イエスを信じることの主な恩恵について、詳しくご説明しました（7-17ページ）。イエス様の救いは、約束という形でわたしたちに示されました。そして、十字架において自らの血で、そ

の約束に封印をされたのです。「本当にはっきりとあなた方に告げる。わたしを信じる者は永遠の命を持っている」。先の述べた恩恵とは、平安、愛、神へ完全な信頼を置けるということ、イエス様との友情という関係性、そして、神の子の持つ力、完璧さ、自由を経験することでした。わたしたちに与えられた福音の偉大さによって、心と魂を新たにするのに、もう一度、その箇所を読まれてみるのもよいかと思えます。このような真実は、クリスチャンとしての教育にとって、非常に重要な要素です。イエス様によって解放された真実と、その豊かさを学ぶことは、わたしたちに喜び、愛、義、および力に満ちた人生の力を与えてくれることでしょう(ヨハネによる福音書第8章32節)。

福音を学び、そこに自らを定めることに深く関連している、もう一つの初穂、最初の実とは、イエス様の愛と善、そして喜びを経験することです。これが魂の回復と繁栄にどれだけ大切なことであるかは、ご説明するまでもないでしょう！イエス様がわたしたちに向けられた愛を学び経験するほどに、わたしたちの命はすばらしく豊かなものとなるのです。同情、慈愛、善で、さらに満たされるようになるのです。イエス様の愛を経て、わたしたちの心にも愛が花を咲かせ、わたしたちはほかの人々にとって、すばらしい慰めとなるのです。

わたしはイエス様を信じる人の中にも、イエス様の愛を実際には知らない人もいるということ、あえて言いたいと思います。厳格で要求の高い主人であり、地獄という威嚇を口にし、永遠の命はその規則を守る選ばれた者にのみ与えられる、イエス様をそのような方と考えているようです。そのように考えている人に、イエス様について尋ねたことがあります。すると、その人の考えているイエス様とは、人類をその心の善によって救った救い主イエスではありませんでした。その人のイエス様とは、よい弟子とみなされた人だけが救われる、半分だけの救い主イエスなのです。ですから、このような人は、信仰から信仰にではなく、良心の呵責から別の呵責に生きているのです(罪の告白と呵責は決して終わることがありませんから)。そして、また、栄光から栄光にではなく、恐怖から恐怖に生きているのです。イエス様をこのような方だと考えているのなら、あなたは神の愛を経験していないことになります。確かに、わたしたちの神は炎を燃やし、その名と報復は何にもまして恐るべきことです。ですが、神はその愛と恩寵によって、この世を裁くためだけでなく、救うためにイエス様をこの世に送ってくださったのも、また真実なのです。はっきり言いましょう。もし救われ、永遠の命を経験したいのであれば、あなたは救い主イエスを信じなければならぬのです。イエス・キリストは神の愛の表現であり、わたしたちはこの愛を受け取らねばならぬのです。わたしたちはヨハネの第一の手紙第3章16節の中にこう書かれているのを知っています。「これによって、わたしたちは愛を知っています。彼がわたしたちのために自分の命を捨ててくださったからです」。同じく、ヨハネの第一の手紙第4章8節から10節にはこうあります。「…神は愛だからです。神の愛はこれによってわたしたちの内に示されました。すなわち、神はそのひとり子を世に遣わして、わたしたちが彼を通して生きるようにしてくださったことです。愛は、わたしたちが神を愛したことにあるのではなく、その方がわたしたちを愛し、ご自分のみ子をわたしたちの罪のための贖《あがな》いの犠牲として遣わしてくださったことにあるのです」と。さらにヨハネによる福音書の第3章16節、「神はそのひとり子を賜ったほどにこの世を愛してくださった。それは御子を信ずるものがひとりも滅びないで、永遠の命を得るためなのです」はなじみ深い、すばらしい聖句です。先にも述べたように、これはわたしたちが受け取り、信じるべきメッセージです。わたしたちは、わたしたちの魂へ向けられた神の愛をよく知

らなければなりません。ヨハネの福音書第4章16節には、「わたしたちは、神がわたしたちのために抱いておられる愛を知っており、信じています」とあります。これが、イエス様の愛と善を受け入れることは、主を信じることの最初の実だと言った理由なのです。主は愛の神であり、わたしたちに対するその考えは一方的な裁きではなく、同情心、恩寵、慈悲、善に富んだものなのです。そして、善と慈悲は、生涯、毎日もたらされるものであること、わたしたちを真の後悔に導くのも、主の善であることだと学ぶ必要があります(ローマ人への手紙第2章4節)。これは主なる神からわたしたちが受け継いだ、嗣業の一つなのです。もし、神がわたしたちに抱かれる愛を信じないのであれば、つねに恐れと奴隷の境遇のなかに生きることになるでしょう。ですが神のわたしたちに対する愛を知り、信じるのなら、わたしたちは解放され、完全な愛がすべての恐れを除いてくれます。神のイエス・キリストに対する愛を知ることによって、わたしたちはいかに愛するか、完全な愛を実につけるかを学べるのです(ヨハネの第一の手紙第4章18節)。若い信者が何かしてみようと試みる前に、まず、自分たちに対するイエスの愛の真実の中に定められなければなりません。そして、この真実の中に定められて初めて、毎日がすばらしく輝かしい、最高のものとなるのです。毎日が善と喜びにあふれるでしょう。たとえこの世の労働や痛み、困難がどのようなものであれ、魂にはすべて安し、なのです。しっかりと、平安の中に根を下ろし、定まっているのです。その心の歌は、「イエス様、わたしの愛。あなたはわたしの最大の思い、あなたを考えるたびに毎日は喜びにあふれます。あなたの愛にとどまるとは、なんとすばらしいことでしょう!」

イエス様の喜びは、その愛につながっていると信じています。主の愛を信じる時、わたしたちは溢れんばかりの喜び、賛美、そして感謝の思いに包まれ、どうしようもなくなるほどなのです。この世に生きるわたしたちにとって、イエス様の喜びと救いの中にとどまること、それは、何事にも代えられない、とても重要なことなのです。この世は邪悪なところ。聖書は、わたしたち信者はここに生きている間、闇の力に抗して戦わねばならないと教えています(ガラテヤ人への手紙第1章4節、エペソ人への手紙第6章12節)。このように、わたしたちの魂を狙う多くの力が、イエス様にあるわたしたちの喜びと相続物を奪い去ろうとしています。しかし、イエス様はわたしたちに、永遠の命を授けました。敵がだれであろうと、そのすべてに打ち勝つ力を確かに持っています。ですから、わたしたちを愛してくださる主を通し、自分はどんな支配者よりも勝るのだと、そう完全に信じ続けなければならないのです(ローマ人への手紙第8章37節)。イエス様の喜びにとどまる、よい方法があります。それは、その喜びに続く栄光を、いつも胸に抱き続けなければならないのです。わたしは個人的に、イエス様と天の御国にある栄光を思い、空想するのが好きです。そして、イエス様や、すでに栄光の中へと旅立っていった人々が、今、何をしているのだろうか、考えたりもします。主に賛美を献げ歌い、神の中で喜びに浸っている、そうに違いありません!そして、わたしもすぐにそこへ向かい、ほかの信者と共に過ごすことになる事実、それを考えることが好きなのです。栄光の中で聖人たちが集い、主と顔と顔を合わせる、そのような空想に身をおくことを、こよなく愛しているのです。つまり、いつか消えてなくなるこの世のことではなく、やがて来ることへと思いを馳せるのは良いことなのです。この世にある問題は、実際に起こっていることであり、煩わしいことは否めません。ですが、そのような問題に翻弄されてはいけないのです。パウロは、「それは、主イエスをよみがえらせたかたが、わたしたちをもイエスと共によみがえらせ…だから、わたしたちは落胆しない。たとえわたしたちの外なる人は滅びても、内なる人は日ごとに新しくされていく。なぜなら、このしばらく

の軽い患難は働いて、永遠の重い栄光を、あふれるばかりにわたしたちに得させるからである。わたしたちは、見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠につづくのである」(コリント人への第一の手紙第4章14節から18節)と言っているのです。

キリストにあつての兄弟から聞いた話を、お話したいと思います。自分が親しくしていたクリスチャンの友人がなくなり、そのお葬式に参列したときの話です。そのお葬式の時、参列していたすべての信者は、主の善をたたえ、祝っていたのです。ですが、参列者の中に、クリスチャンの葬式に不慣れの人がいました。その人は、親しい友人の葬式の場で、人々の喜びに満ちた顔を見て、大変驚きました。そして、その兄弟に、なぜ参列者が喜んでいいのかと説明を求めました。その人には、喜びの理由が分からなかったのです。兄弟は、もちろん彼の死を喜んでいてはいませんが、みなイエスの喜びに満たされ、いつかその友人と天の御国で、イエスの御前で、そしてほかの信者たちとまた一緒になることができると知っているからだと言ったのです。兄弟はまた、この世では幸福でないこともある、しかし、イエス様と共にある喜びは、すべてを超越するという点も説明しました。わたしたちは永久であるものも、つかの間であるものも、それがどのように悪いことであっても、イエス様と共にある喜び、そして、イエス様にある力を失わせることはできないのです。そうです！わたしたちにはイエス様がおられ、主の中に生きているのです！すべてに打ち勝つのです！この喜びを、いつでも持ち続けようではありませんか！

最後にクリスチャンとしてのわたしたちの人生の目的を知るといふ、最初の実についてお話したいと思います。この人生への目的を知ることの重要性を、軽視してはいけません。クリスチャンとして生きる目的、それが往々にして誤解されているという理由だけでも、軽視してはならないのです。ヨハネの第一の手紙第3章23節では、次のように語られています。「これがその方のおきてです。すなわち、わたしたちがその方のみ子イエス・キリストの名を信じ、彼がわたしたちに命じられたとおりに、互いに愛し合うべきことです」この箇所が、クリスチャン生活の要約であると言えます。とても簡潔なものです。これが子供たちだけに向けられたメッセージであり、その子供たちだけが受け取れるものなのです。ハレルヤ！わたしたちはイエス・キリストを信じ、お互いに愛し合えばいいのです。ただそれだけなのです！

第2章でもご説明したように、わたしたちは、イエス様を信じた瞬間に持っていた簡潔な信仰を持ち続けなければならないのです。パウロは「あなたがたは主キリスト・イエスを受け入れたように、彼にあつて歩きなさい」のようにいったのは、そういう意味なのです。ヨハネもまた、その第一の手紙の最後に、イエス・キリストの信者に対してなぜこの手紙を書いたかを説明しています。「わたしがこれらの事を、神のみ子の名を信じているあなた方に書き送ったのは、自分たちが永遠の命を持っていることをあなた方が知るようになるため、また、神のみ子の名を信じ続けるようになるためです」(ヨハネの第一の手紙第5章13節)。ヨハネはここで、イエス様を信じる者は永遠の命を持ち、そしてイエス様を信じ続けるべきだと、明らかにしています。ですから、ただイエス様を救いのために信じて、そこからさらに進んで、救い主であるイエス様より他のものを中心し始めるということをしてはいけません。イエス様への信仰を超えるものなどありません。わたしたちは、主にあつて生き、息をし、存在を委ねているのです。わたしたちは主とその言葉に従い、主はわたしたちの内におられ、わたしたちをすばらしい信者の体とするために働かれていますと信じましょう。

次にイエス様を信じる者として、わたしたちはお互いを愛し合わなければなりません。前にも示したよ

うに、これはわたしたちの努力にかかわらず、イエス・キリストの福音の恩寵と知識を増してゆくとき、霊魂の働きを通して自然に身につくものなのです。つまり、イエス様を信じる者はすべて、自然に愛という実を持つようになるのです。主はぶどうの木、わたしたちはその枝なのです。主はわたしたちを通し、このもっとも美しく、貴重な実が実るよう、働きかけているのです。愛は聖霊からの一番大きな贈り物です。愛は律法を実現させるものです(ローマ人への手紙第13章10節)。そして、それだけでなく、イエス・キリストが問題視されるのは、愛によって働く信仰のみである、とも書かれています(ガラテヤ人への手紙第5章6節)。

わたしたちが生きている今の世の中では、多くの人々が、クリスチャン生活の目的は、まだ救われていない人々に福音を伝えることに尽きるのだとあなたに信じさせようとしています。ですがこれは間違いです。宣教活動、伝道主義、そして迷える人々に福音を説くことの重要さは疑いのないものではありません。しかし、それはわたしたちの人生の目的ではありません。迷いの中にいる人々に福音を説くことは、イエス・キリストへの信仰から来る、多くの実の一つに過ぎないのです。事実、もしわたしたちがイエス様を信じて互いを愛していれば、まだ救われていない世の中は、イエス様について知るようになるでしょう。イエス様はこの同じことを次の言葉で表しておられます。「あなた方が互いに対して愛を抱けば、これによってすべての人は、あなた方がわたしの弟子だということを知るだろう」(ヨハネによる福音書第13章35節)。天なる父への祈りの中で、次のような、同じような結論に至っています。「彼らがみな一つになるためです。ちょうど、父よ、あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるのと同じようにです。それは、彼らもわたしたちのうちで一つになるためであり、あなたがわたしを遣わされたことを世が信じるためです」(ヨハネによる福音書第17章21節)と。神の御心は、わたしたち信者が互いを愛することにあります。信者が仲間の信者を愛するのです。ただそれだけです。遠大すぎるものはなにもありません。つらすぎるともないのです(ヨハネの第一の手紙第5章3節)。わたしたち信者が互いを愛するならば、わたしたちは真に一体の完全なものとなり、不信心者もやがて、天なる父がイエス様をこの世に遣わされたことを知るようになるでしょう(ヨハネによる福音書第17章23節)。

これまでのすべての結論は、「御子であるイエス・キリストの御名によって信じ、イエス様が命じられたように、互いに愛すること」となります。しかし、この言いつけを守り始める前に、実はこれこそが、わたしたちクリスチャンとしての人生の目的であることを、完全に理解しなければなりません。クリスチャン生活を複雑にしてしまうような誘惑はすべて捨ててしましましょう。クリスチャンとして、わたしたちが生きていくためにある神の目的とは、簡素で偉大なものです。その目的は、決して、方法、システム、活動などとすり替えられてはならないのです。もしイエス様を信じるのであれば、ほかのすべてのこと、そして、すべての大きなものは、自然と生まれ出てくるでしょう。これを信じなければなりません。

本章では、イエス様への信仰によってもたらされる最初の実について見てきました。クリスチャン生活の最初の実、それは自分自身の魂の回復と養育なのです。子供がいずれは大人に育ってゆくように、キリストの赤子もそうなるのです(ヨハネの第一の手紙第2章12節から14節)。ですがもしキリストの赤子が食物を与えられず、適切な育児がなされなければ、その成長を望むことはできません。わたしはこの章が、若い人々に慰めをもたらし、定まることへの助けとなることを祈ります。この章全体と前章は、ある意味、クリスチャン生活への導入部分だといえるでしょう。では、次の二つの章では、クリスチャン生活

について、さらに詳しく見ていきます。第4章では、クリスチャン生活について、さらに個々の信者という視点から見ていきます。先に引用したヨハネの第一の手紙第3章23節にもとづいて、ご説明して行きたいと思っています。第5章では、本書の結びとして、神がイエス・キリストの体、つまり教会全体に持つ、壮大な目的についてご説明したいと思います。